会員ニュース　2018.11.25

全国農林水産物直売サミット（和歌山）2018.11.02～03

全国農林水産物直売所サミットはまちむら交流機構を事務局に毎年1度日本各地で開かれる。17回目の今年は、和歌山県での開催となる。和歌山県と言えば「産直市場よってって」の本拠地である。また、来年は山形県の開催ということで、庄内の産直、産直あぐりも駆けつけている。叶野由佳店長は分科会とパネリストを受け持つ。山口成美会長も分科会を担当だ。研究会の会員では、あいとう直売館、びわこだいなか愛菜館、田布施地域交流館、が参加している。

プログラムでは(株)プラスの野田忠会長から活動紹介があり、8000人以上の出荷者による多店舗展開、また公益財団法人による後継者の育成は、「地域を支え、地域経済も動かす直売所」というテーマにぴったりの話題提供であった。

分科会は山口会長が「直売所間商品交流の進め方」、叶野さんが「地域農業を支える、中山間地直売所の役割」というテーマで担当した。筆者は産地での集荷と都市での販売に興味があり、「地産地消」と「地産都商」を10年近く実践しているJAしまねの須山一さんの話を聞く。3000人の生産者から40ヵ所の拠点で集荷流通し、販売額は8億円になるという。出雲市や米子のスーパーの一角を借りて販売するヤドカリ商法から、現在は尼崎市の阪急オアシスでも同様な仕組みでからりの量を販売している。ポイントは流通であり、トラック1台の荷を完売する仕組みづくりという。もちろん、多品目をそろえ、きれいな荷作りをする、という基本があってからこそのものである。どこも同じことなのだが、事業の成功にはリーダーシップと展望が必要なのである。

翌日は有田市の早和果樹園と田辺市の「よってって・いなり本店」を視察した。次ページに写真で紹介する。

会場は和歌山県民文化会館。約300人が参加。

㈱プラス野田忠会長の講演。平成14年5月からの活動、16年間で現在24店舗だが、毎年のように新規開業が続いている。

パネルディスカッション、司会は産直新聞の毛賀沢さん、パネリストは山田秀樹（めっけもん広場店長）、叶野由佳（産直あぐり店長）、西坂文秀（元さいさいきて屋店長）

JAしまね須山一さん、遠隔地へ向けた地産都商がテーマ。流通問題の解決が勝者の条件だ。

交流会にて山形県澤川さんのプレゼン

有田市早和果樹園にて、秋竹新吾社長と

産直市場よってって・いなり本店

よってってのマスコット「よっちゃん」とともに野田正史社長

どの店も入口にはよってってのポリシー「6つのお約束」が掲示される。オリジナルテーマソングも店内に流れている。

農産物は豊富。台風などで大きな被害を受けているが、畑の植物は元気を取り戻した。ちょっと元気すぎるようだ！

花は生産も需要も共に多い地域。十分な広さがある。

すべての商品に言えることだが、取り組むならば幅広く、深堀する。米売場には精米のほかにレトルトご飯、押麦、米麹まで並ぶ。

魚の産直は相変わらず充実している。これを作ってから、店の格が上がった、と野田社長。

どれも超新鮮！マル体が売れるのは土地柄か

2階の日本一の梅売場はさすが。梅酒売場にはもちろん試飲コーナーが。

梅干し売場は広々、ギフトにも